

保護者と副園長とで語り合うことの意味を探る

—保護者・保育者の変容に着目して—

○高橋 陽子 灰谷 知子 （お茶の水女子大学附属幼稚園）

はじめに

IT の発達により急速に変化し続け、情報があふれる社会の中で、子育て中の親は常に我が子に向き合い続けている。2019 年に本園で行ったアンケート（子どもの生活及び保護者の子育てに関する意識と実態調査 区内3歳児保護者 234 名）によると、「子育てでどうしてもいいかわからなくなることがある」に対して、半数以上が「よくある・ときどきある」と答えている。また、「相談する相手は」に対しては「配偶者・親族・園の先生や公共の相談機関」と答えており、相談できる相手が身近にいることは、親にとって安心につながると言えよう。

入園後の保護者と保育者との関係構築については、さまざまな模索がされてきている。本園では、面談や保護者会といった通常の意見交換のみならず、保護者とのコミュニケーションの場として、園の日々の写真等による記録に保護者の感想をもとめるドキュメンテーションの開発など、さまざまな試みをおこなってきた（高橋・佐藤・小玉、2020¹⁾）。

今回は、本園で独自に行っている副園長²⁾との語り合いの場が持つ意味を考えていきたい。

保護者の戸惑いや不安を受け止める

入園前の保護者は、「トイレトレーニングができていない」「集団に入れるか」「友達と仲良くできるか」などに不安を感じている人が少なくない。また、入園したばかりのころは、子どもも親も、初めての場所や人だけではなく、園独自の教育観やシステムなどに戸惑うことが多い。そこで、少しでも悩みや不安が和らぐように、本園で作成した小冊子「育児手帖」を入園前に配布し、幼稚園の考え方や自立についてのことや子どもへの願い（教育目標）などを知らせている。また園要覧により、教育方針や日々の過ごし方、年間スケジュールを伝えることもしている。

しかし実際に入園してみると、思いもよらないことが起こる時がある。朝幼稚園に行きたくないと言うことや登園時泣いて保護者と離れられないこともある。また、お迎え時に先生に抱っこされていたり、手が出たりかんだりを告げられたりすることもある。

そのようなことが重なって、保護者が不安を抱え、その不安が子どもに無意識に向けられてしまい、子どもが余計に落ち着かないことも出てくる。

保護者の不安が少しでも軽くなり、子どもの安心にもつながって欲しいと願い、副園長として担任保育者（以下、担任）と保護者をつなぐ役目を担いたいと思っている。

保護者が直接副園長に悩みを話してくることもあるが、たいていは、担任と保護者との面談やちょっとしたやりとりから感じたことを担任が副園長に伝えてきて、わかることが多い。

お知らせや始業式、保護者全体会等の機会に「いつでも副園長に声をかけてください」と伝えているが、実際に声をかけてくる保護者は殆どいないのが実状である。

そこで、一つの取り組みとして、保護者と副園長とで語り合う会を行っている。元々数年前まで 1、2 か月に一度ある誕生会（誕生児の保護者のみ参加）後に、保護者と副園長が一部屋に集まり、誕生会の感想や誕生秘話、名前の由来を伝え合うような懇談会は行っていた。

現在行っている語り合いも、誕生会後にしているものではあるが、ここ数年間で意識的に内容を変えてきた点があり、その変遷や意義を考えてみたい。

保護者と副園長で語り合う会の変遷

○誕生会後の懇談会～2020年2月：懇談会後には、同学年のみならず異学年の保護者同士の親しみが増し、会話が aumentato と言う。副園長が担任に話題を伝えることで、担任が保護者や子どものことを保育とは違う側面から知ることになり距離が縮まる良さがあつたと捉える。

○「ホットモタイム」2018年10月～2020年2月：懇談会とは別に、保護者と副園長の語り合いの場を設けた。きっかけは、本園が文部科学省の開発指定を受け、その時のテーマである「幼児の発達と学びの連続性を踏まえた幼稚園の教育課程(以下略)」の編成に活かすために、主に弟妹が2歳児の保護者に集まっていた2歳児の実態や悩みを語り合うという主旨であった。「ホットモタイム」の名称は当時の副園長 上坂元絵里氏により「保育を共に」「ホットに語り合う」という願いを込めて命名された。

○誕生会後の語り合いを「ホットモタイム」とする(2021年4月～現在。コロナ禍の1年間は集うことを控えていた)：保護者が集い語り合う場の必要性を感じ、復活させた。「ホットとできる」という3つ目の意味合いも加え、「ホットモタイム」の名称を引き継いだ。

「ホットモタイム」の概要

誕生会後ということもあり、まずは誕生会の感想を語ってもらう。同じ空間にいて、同じモノを観ていた者同士、共感できることが多いためである。

感想後は、2021年の1年間は、副園長が「2歳児の頃の様子」「入園前に心配だったこと」「入園前後の変化」のように園の研究に関連するテーマを設定し、話してもらった。なぜならば、園のグランドデザインとして保護者も園の教育を共に考える担い手として位置付けていることもあり、感想に留まらない話をしてもらうことで、研究や保育に携わっている意識をもつことを期待したからである。またテーマを決めることにより、同じような話をする保護者がいるかと思えば（同感）、全然違う姿が語られることがあり（気づき）、副園長がその間をつなぎ、保護者同士の語り合いが生まれるようにと願った。

2022年4月からは、2歳児の研究がひと段落したこともあり、感想後のテーマを「子育て（子どもの育ちの中）で感じていること」とした。保護者自身の今、思うことを率直に語ることで、悩みはもとより、自身の子育ての振り返りとなったり、子どもの成長を感じられたりする、自由度の高い内容となった。

以前はこうだった、という事実や、その時から今に至る心もちの変化や、なぜそう思うのか、思うようになったのかも語られる。それが、保護者同士の共感を生むことにつながっているように感じる。

一巡したのち、語りの中で多く聞かれた内容や、悩み、みんなが大きくなずいていたことなどを進行役の副園長が取り上げ、感想や自分はこうしているなどを挙手で語ってもらうことにしている。副園長は、合間合間で自身の体験談を語ることはあっても、アドバイスをする立場ではなく、保護者同士のやりとりが活発に行われることを念頭に進めている。

「ホットモタイム」の実際

保護者の語りの中で多かったことは、○食事のこと○兄弟喧嘩○時間の区切りが付けられない○なんで？と子どもに聞かれた時の答え方○衝撃的なニュースが多い。どう伝えようか悩む○一人で遊ぶことが多いが親としては友達と遊んで欲しい、などである。

以下に「上の子が下の子にまだ早いと思うことも教えてしまう」という悩みを取り上げた時のやりとりを挙げる。

「まさにうちは、(年長の)本人が、2歳の下の子に教えてしまい、下の子が失敗することができない」
 「上が口出し、下がうっとうしが。上には、やらせてあげてと説得するが、お互い殺気立ってくる。父親が上の子、私が下の子と出かける等、時間や場所を分けることもしている。ストレスが軽減する」
 「大人になると大した影響ないとも思う。そう生まれたのだから仕方がない。母がどちらのペースに合わせるかその時々できちんと決めるように心がけている」
 「下の子をいじめる。本人の怒りが、弱い者に向かっている気がする。解決する力あるはずと信じて見守っているが、いいのかな…」
 「一人っ子なのでそういうごちゃごちゃ聞くとうらやましい」
 「地域の子どもたちと一緒に過ごすようにしている。分けるというより、みんなでごちゃまぜで遊んでいる。」

以上のように、共感や解決策を含め、自分の気持ちや考えを述べ合うことが続いていった。

保護者の意識の変容

保護者の感想からは、「それでも、悩みはつきません」という声もある一方で、「共感できること、参考になること、安心できることがありました」「子どもの成長を改めて感じることができました」「これもあれも、子どもに言いたくなるが、『子どもは変わらない』と聞いて、そういうものかと納得した。子どもの個性、温かく見守りながら過ごしたいと思った」という言葉も聞こえた。

悩みを解決する場というよりも他の考え方を参考にする、やってみるなど、保護者自身が選び取ることを副園長としては願っているが、感想にはそのような声が多く

聞かれた。ホットモタイムによる保護者の考え方の変化とがうかがえ、子育てを保護者同士で安心して行っていると捉えている。また、各学年の保護者が混じり合って話せることは、保護者自身の振り返りの場や見通しを持てる場になっていることが確認できた。

担任保育者の意識の変容

「ホットモタイム」の内容は、すぐに全担任と共有する。子どもの一番近くにいる担任に保護者の語りを伝えることで、保護者の関心事や揺らぎを知った上で子どもの姿や成長について双方で語り合っ欲しいと願うからである。以下に、担任の「ホットモタイム」に対する思い、変容をまとめる。

- ・「気になること」や「他の子と比べて」子どもを語る保護者が、ホットモタイム後の面談では「我が子なりの変化を受け止めたい」と語り、肯定的に捉える言葉が増えたように感じた。
- ・子どもや子育てについて、率直に思いを伝えてくる・もっと語りたいと思っている保護者の様子を感じ、担任としてももっと耳を傾けたい、語り合いたいと感じるようになった。
- ・他の保護者の話を聞いて、いろいろな立場の先生が保育に携わっていることを実感でき、安心につながっていることを感じる。
- ・保護者と子どもの姿を語る時、実際に園で見せる姿を基に、「成長してきたこと」「課題に感じていること」といった両端を伝えてしまいがちである。その保護者のホットモタイムの語りややりとりを知ると、今だけではなく、未来にも過去にも思いを巡らせて、新たな観点で子どもを捉えようとしていることがわかる。園で見える姿と、家庭で見せている姿の違いも感じられ、一方向的に園での姿から伝えるのではなく、今の保護者のニーズを受け止めながら、子どもを真ん中において、嬉しさや悩みを共有しようという意識が変わってきた。

今後に向けて

ホットモタイムに関して言えば、複数での語りは苦手な人もいるし、会によって内容が異なることもある。共有方法や1対1での声かけなど更に工夫していきたい。

「上の子が下の子に……」を語った保護者に半年後声をかけてみると「自分だけではないことがわかり安心し、姉・本人それぞれの良さに目がいくようになった。あったかい雰囲気がありこのような環境に親子して身を置いていることがありがたい」とのこと。ホットモタイムだけではなく、担任の存在、学年掲示(ドキュメンテーション)、養護教諭やSCなどいろいろな立場の人たちがいること等、全てが相まってそう感じられていると思う。「ここにいて大丈夫」と思える時間・空間を、園全体で創り出していきたいと考える。保護者や全担任がいろいろな立場つながっていることを意識した上で、子育てや保育について一緒に考え合うきっかけを副園長が創り出すことが重要であると考えます。

参考文献：1) 高橋陽子・佐藤寛子・小玉亮子(2020)「動きだすドキュメンテーション(1)・(2)」日本保育学会第73回大会発表論文集：K503-K506頁。

註：2) 本園は国立大学法人であることから、園長は大学教員の中から選任されている。実質は副園長が運営を担っているため、以下で述べる「副園長」は、園によっては「園長」に置き換えられると考える。